国際仏教学大学院大学研究紀要
第26号（令和４年）

近世檀林の蔵書目録と書庫
―西本願寺檀林の大蔵虫払目録―

万波寿子

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXVI, 2022

近世檀林の蔵書目録と書庫―西本願寺檀林の大蔵虫払目録―

万波寿子

はじめに

浄土真宗本願寺派の本山である西本願寺学林は、日本近世において最大級の檀林であった。その蔵書もまた近世において最大規模を誇ることは間違いない。幸いなことに、今日までその大半が災害を免れ、龍谷大学大宮図書館に所蔵されている。学林の蔵書目録としては天明年間の智洞編『龍谷学黌内典現存目録』や近代の『龍谷学黌大蔵書目録』十二冊、明治期の服部範嶺編『龍谷学黌大蔵目録』（二冊）、活字本『龍谷学黌大蔵書目録』などが知られているが、本稿ではここに新たに三種の「大蔵虫払目録」を加えたい。

この目録は現在ほぼ知られておらず、学林の現在の姿である龍谷大学が編纂した『龍谷大学三百五十年史』（通史編上巻）[1]が多少の紹介をしているのみである。注目されなかったのは、毎年行われる蔵書の虫干し時に使用するだけの一過性の目録であって、蔵書目録というよりは大量の記録類のひとつと考えられてきたためであろう。

しかし、これらの書は決して一過性の目録ではない。しかるべき時にその基礎が作られ、長期間利用され続けた。またその間に修正を繰り返してきてもいる。結果として、これらは近世後期から明治初期までの学林蔵書の

一大目録となっている。さらには、当時の者たちにとって蔵書利用の際の閲覧目録かまたはそれに近いものであった可能性がある。

これらの目録がどういった背景で成立し、どういった思想を含むもので、どう管理されまた利用されたか、そしてそれが近代にどう接続したかを知ることは、当時の西本願寺の教学の在り方を知ることはもちろん、近世に飛躍的に発達した書物文化の研究上も有益であろう。

なお、翻刻が必要な資料については、漢字は通行のものに改め、句読点を私に付している。また明らかに誤字と思われる箇所には右に正しいと思われる字を補っている。翻刻された資料を引用する際も、合字は開き、割注は〈　〉で示した。また、判読できなかった文字は「□」とし、横に推測で（　）の中に文字を付した。また、本の修復などにより見えなくなっている文字は「■」を宛てている。

一　三種類の「大蔵虫払目録」

〈『龍谷大学三百五十年史』の解説〉

学林の蔵書であるが、前述のように近世に学林で利用された蔵書はその多くが今も龍谷大学大宮図書館に所蔵される。ただし、同図書館には近代に入ってから納められた古典籍も多く、現在は学林蔵書と混在している状態である。しかし、学林蔵書には明確な特徴がある。例えば図1―②に見えるような「龍谷學黌大蔵書」という長方印の蔵書印が押されているのである。これが最も確実な学林蔵書の証となる。また、特殊な場合を除き、原表紙であればその右上に学林で割り振られた函の番号と、「共〇冊」という表現で総冊数が直書きされている。

さて、学林蔵書は年に一度、旧暦の七月上旬頃に虫干しがなされたことが分かっている。なお、実際には西本

願寺では「虫干し」ではなく、「虫払」（むしばらい）と呼称していたので、本稿でも虫払と呼称するものとする。この虫払いについて、先述の『龍谷大学三百五十年史』には、以下のようにある。[2]

蔵書の虫干については、延享四年（一七四七）以来『万検雑牘』（学林の記録のひとつ）に記載されているが、藹上（藹満と上座か。いずれも長く学林で研鑽を積んだ者たちを指す）によって夏講終了後直ちに実施されることに定められていたため、通常、六月末または七月初に行われていた。虫干にあたっては蔵書の存欠も調査することとなっており、（龍谷大学の）大宮図書館には多数の『虫干目録』が伝わっている。

（　）内筆者）

ここで想像されるのは、その年毎に蔵書チェックのための簡易的な目録が作られており、それが現在まで大量に残されている、ということである。しかし、実際には大宮図書館に所蔵されているものは二件のみで、非常に少ない。

詳しくは後述するが、この二件の資料は実際には三種類の目録から成っており、それぞれに強い関係性が見出される。また、手ずれや表紙の疲れなど長期にわたって利用された痕跡がある。学林にとって重要な目録だったために、今日まで残されている可能性があるのである。

なお、三種類の目録はいずれも「大蔵虫払目録」（あるいは「続大蔵虫払目録」）と題しているので、本稿でもこれに倣い学林の虫払目録を「大蔵虫払目録」と呼称する。

〈大蔵虫払目録の基本情報〉

まず、龍谷大学大宮図書館に二件ある「大蔵虫払目録」のうちの一件、『大蔵虫払目録』大本六冊（龍谷大学大

宮図書館所蔵、請求記号：201. 7/21-w/6）について。六冊から成るが、実は三冊ずつ二つに分けられ、それぞれ別の目録となっている。いずれにもほぼ同文の凡例が綴じ込まれており、この凡例の冒頭部に「龍谷學黌大蔵書」印が押してある。そして二種類ともに、学林の蔵書の書目が本が収められていた函ごとに挙げられている。この、函の番号をまず書き、以下にその函に入っている書目を列記するのが大蔵虫払目録の基本様式である。

もう一件の大蔵虫払目録は『続大蔵虫払目録』と称する大本二冊（龍谷大学大宮図書館所蔵、請求記号：201. 7/20-w/2）である。こちらには学林蔵書印はない。しかし、内容は確かに学林の蔵書目録で、外題に「続大蔵虫払目録」とあるから、他の大蔵虫払目録の続編であると思われる。詳しくは後述するが、その内容から先の二件のうち、より新しい方の続編にあたるものと判断される。

なお、この二件三種類の大蔵虫払目録の料紙はいずれも半丁一〇行の、版心に「龍谷學黌大蔵」と印刷されている黒の罫紙が使われている。また、三種ともに見開きにした時の左下の部分の手ずれがひどく、頻繁に利用されたことが窺われる。

現在六冊一具とされているものの、実際には二種類ある大蔵虫払目録を見てみよう。第一冊の本文冒頭の前に「蔵書虫払凡例」五丁が綴じ込まれており、寛政五年（一七九三）の年記がある。寛政五年より少し前から学林蔵書は急増していたため[3]、このとき虫払のやり方も整理され、凡例が作られたのだろう。

この凡例の中に「函に納め候時は必す此目録に引合せ候事、若紛失の品有之候はゝ別に帳面をこしらへ、これを記し後に吟味すへし」とある。虫干しが済んで本を函に戻す時には「必す此目録に引合せ」ることとしているのである。よって、これらの大蔵虫払目録が虫払の際に蔵書のチェックに利用されたことは間違いない。そして、右の文言が凡例であるからには、最初期の大蔵虫払目録は寛政五年頃には存在し、毎年の虫払に利用されていた、ということになる。そもそも一過性の記録類ではなく、長期的に使用するものだったのである。参考までに、時

代がより古いと思われる方の大蔵虫払目録の凡例を左に掲げる。大きな書庫の虫干しの手順や注意事項を具体的に挙げており興味深い。

蔵書虫払凡例

一年々相勤候而勝手覚し人を以支配人と定むへし

一人数多く集め候事甚悪く、随分日数をまし叮嚀に□(す)へし

一講堂ニ而書物をひろけ候時必す西の方より東の方江次第にひろけ、仕舞候時も同く西の方より東江次第ニ仕舞へし、書物並函之類日影のあたり候を甚嫌ふ事也

一随分書物のとちめの所をたゝきほこりをはらひほすへし、虫の増候はほこりよりわき候

一唐本の分ハうつむせにほすへし、あほのけにする時は風ニ而あほち候ゆへ破れ候事まゝ是あり

一函に納め候時は必す此目録に引合せ候事、若紛失の品有之候はゝ別に帳面をこしらへ、これを記し後に吟味すへし

一書物の内蔵本の印無之品見当り候ハゝ早速印形を押すへし

一函に障臘を入候時随分多く用ゆへし、必倹約すへからす

一書物はらひ、席未満の所化中其役に加り度被願出候共、其人物勘寮(深)の上可差許、文字もなく学に志もなき人をましゑ候時は大に取紛し反而紛失の基に候事

一虫払の節、役人之外は講堂江出入する事を不許免に、当夏未虫払の節、初日迄現存之書籍一部致紛失候、外無役の輩壱人ニ而も出入いたし候ハゝ、吟味の節行届不申候、此段御心得可有之事

寛政五丑安居六月日　　勢州　萊洲

図1-①　大蔵虫払目録Aの三冊揃いの表紙

なお、末尾に名を連ねる莱州、海蔵、覚音についてであるが、海蔵と覚音については未詳ながら、莱州については、了恵、流海とも称した学僧で、西本願寺学林の第六代能化（学林の長）である功存の門人であって、功存の『願生帰命弁』を擁護する『排謬翼宗編』二巻を著している。[4] また寛政四年（一七九二）に最も重視される夏安居で、また同八年に夏安居に続いて開催される秋安居においても講義を開いており、一流の学僧といっていいだろう。凡例にも「文字もなく学に志もなき人をましゑ候時は大に取紛し反而紛失の基に候事」とあるように、虫払には研鑽を積んだ志の高い人が関わっていたことは留意される。

支配■　江州海蔵　山城覚音

〈「大蔵虫払目録A」三冊〉

ここからは、この二種各三冊の目録それぞれについて見ていこう。まず、時代がより古いと思われるのが丁子色布目押文様の表紙のものである（図1—①）。内題はなく、外題は題箋に「大蔵虫払目録」と打付け書きされている。袋綴装で大本三冊。表紙はすべて後補。法量は二六・五×一八・五cm。

丁数は、第一冊が凡例四丁・前遊紙一丁・版心に「龍谷學黌大蔵」と

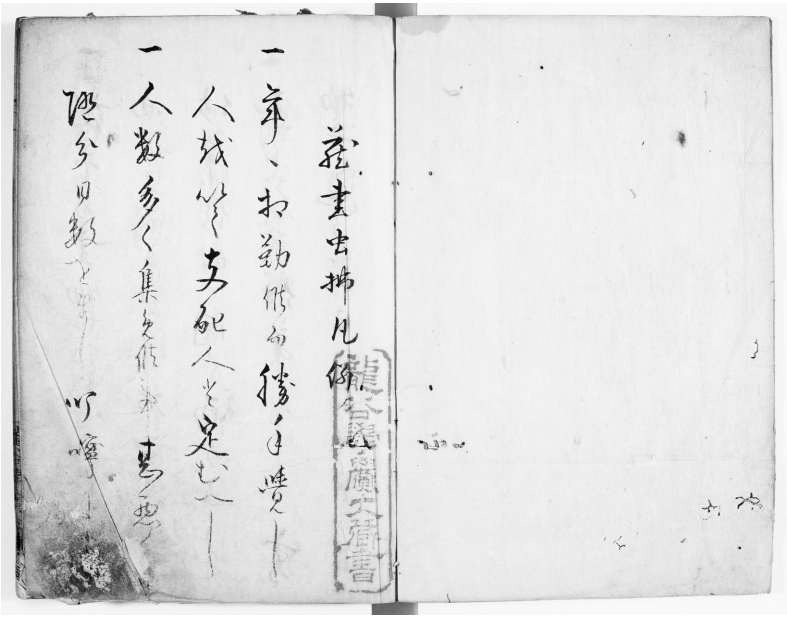
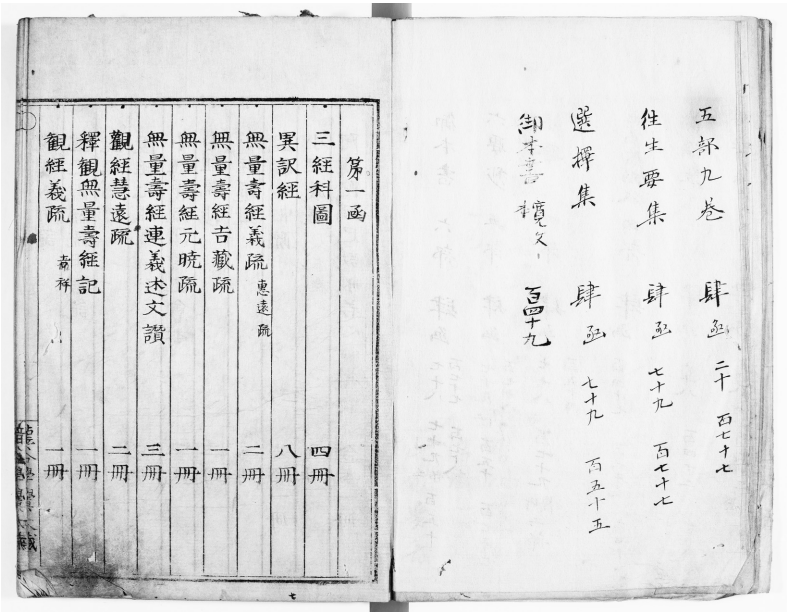


図 1-②　凡例



五部九卷	肆函	二十　百七十七
往生要集	肆函	七十九　百七十七
選擇集	肆函	七十九　百五十五
御本書	肆函	百四十九

第一函

三經科圖	四冊
異訳經	八冊
無量壽經義疏 恵遠疏	二冊
無量壽經吉藏疏	一冊
無量壽經元曉疏	一冊
無量壽經連義述文讃	三冊
觀經慧遠疏	二冊
釋觀無量壽經記	一冊
觀經義疏 嘉祥	一冊

図 1-③　本文冒頭部

ある罫紙を使用した本紙九六丁、合計一〇一丁。学林の蔵書印「龍谷學黌大蔵書」は凡例冒頭に押印されている（図1―②）。第二冊は前遊紙二丁・罫紙の本紙一〇四丁・罫紙ではない白紙の料紙が七丁、合計一一三丁。ただし、本紙の罫紙一〇八丁のうち八丁は手書きの罫紙が使われており、この料紙は白紙の七丁の料紙と同じ紙に見える。第三冊は、前遊紙二丁・罫紙の本紙七八丁・罫紙ではない白紙の料紙一四丁、合計九四丁。第二冊同様、本紙の最後一丁が手書きの罫紙で、この料紙は白紙の一四丁と同じ紙のようである。

第一冊と第二冊が内典の版本、第三冊は内典写本と外典の目録となっている。そして、蔵書が入っている函ごとに半丁を割り当て、まず函の番号を記し、以下にその函に納められた蔵書の書目を列記している（書目が多く書ききれない場合は次の半丁も利用している）（図1―③）。第一冊は内典版本一函から一〇〇函まで。第二冊はその続きで第一〇一函から一八四函まで。そして第三冊は内典写本第一函から三四函までと外典が一函から八五函まで入っている。部数にして、内典版本二二六〇部、内典写本部二四六部、外典四〇〇部の目録である。総冊数は所々一部何冊なのか書かれていなかったり、冊数の代わりに帙の数を書いているため、正確にはわからない。

こうした記述方法から、学林の書庫では、蔵書は内典の版本、内典の写本、外典の三種類に分けられていたこと、それぞれに函に納められていたこと、そして函は右の三種類ごとに通し番号が振られていたことが分かる。

同書の成立は文政年間の頃と推測される。これは、同書に散見される書き込みには年記のあるものがいくつかあり、その上限が文政年間であることに拠る。すなわち、内典版本に「金剛索」という書目があり、その下に「文政庚寅夏蔵」（文政十三年）とあって、文政十三年（一八三〇）の書き込みがある。天明の大火の折り、学林蔵書は無事だったものの、火災の影響で書庫が痛み、建て替えが必要になった。建て替えには長い年月がかかり、ついに完成したのが文政三年のことなので、あるいはその際に整えられたものかもしれない。

一方、その利用期間の下限を考えると、この目録はその使用感から相当な年月使用されたと考えられ、内典の

版本部最後の函である一八四函の書目には明和年間から弘化年間までの出版年の本が挙げられている。とくに、「般舟讃甄解」と「観念法門甄解」はともに弘化四年（一八四七）で、これが最も新しい刊年を持つ書目と考えられるため、同目録は少なくとも弘化四年頃までは利用されたと考えられる。

またこの目録には所々に貼り紙がある。これは欠本を示している。失われた本があると、その書目の行を覆い隠すように細長い紙を貼り付けるようにしていたらしい。多くの場合、その上から「欠部ニ出ス」と書かれており、別に「欠部」の目録、つまり欠本目録があったようだ。この貼り紙は上下の端にしか糊が付いていないので、欠本が補われるとこの紙を剝がしたのかも知れない。

本稿ではこの文政年間から弘化年間の記録を持つ三冊を、今仮に「大蔵虫払目録A」と呼称することとする。

〈「大蔵虫払目録B」三冊〉

もう三冊は、やはり袋綴装で大本三冊、茶色蜀江文様空押表紙である（図2―①②）。やはり内題はなく、外題は題箋に「大蔵虫払目録」と打付け書きされている。表紙は一部に現代の修理が施されているが、先の大蔵虫払目録Aとは異なりほとんど原装の姿を止めている。法量は二六・五×一八・九cm。

丁数は、第一冊が凡例五丁・前遊紙一丁・版心に「龍谷學黌大蔵」とある罫紙の本紙が一〇三丁、合計一〇九丁である。ただし、本紙のうち、最後の七丁は罫紙ではあるが、何も書かれていない。第二冊は、遊紙無し・罫紙の本紙一〇八丁、合計一〇八丁。やはり本紙の最後一丁が罫紙だが記述はない。第三冊は、遊紙無し・罫紙の本紙八五丁で、合計八五丁。こちらも本紙の最後三丁が何も書かれていない。

ほぼ原装のため、各冊の前表紙に内容を説明する貼り紙が残っている。第一冊には、内典の版本百函までを示す「上／自　一／至　百」と墨書された貼り紙がある。第二冊は「中／自　百一／至　百九十一」。第三冊には写本が三三函までと外典が九一函までであることを示す「下／従第一至三十三　写録／従第一至九十一　外典」

との貼り紙が残っている（図2―①）。

その内容は、貼り紙の通り第一冊は内典版本の一函から一〇〇函まで。第二冊は、内典版本が一〇一函から一九一函、第三冊は写本が一から三三函までと外典一函から九一函までの書目が入っている。部数にして、内典版本二三九七、内典写本部二七八部、外典四六七部である。

ただし、最終冊の末尾は外典部の九二函だが、該当の箇所には大きく墨で取り消しを意味するバツ印が書き込まれ、「九十二函已下続目録再出」と右に書き添えられている。よって、この目録には「続目録」があったことがわかる。

成立年は、決め手に欠けるものの弘化四年頃までの書目を収録した大蔵虫払目録Aに比して収録点数がかなり増加していること、かつ、外典部の末尾には「〆九十二等（函カ）文久二戌夏新調帳」とあり、文久二年（一八六二）にこれとは別に、先の「続目録」と思われる外典九二函以降の目録を新調したとあるので、文久二年までには成立していた。よって、弘化末から嘉永頃に成立したと思われる。そして、当該目録には内典写本部の二函で、欠本だった「唯識論述記纂解」十四冊の箇所に「明治六年八月相納畢」と墨書してある。つまり明治六年（一八七三）頃までは利用されていたとわかる。右の文久二年に作られた続目録と合わせ、明治期まで利用されたのだろう。

大蔵虫払目録Aに比して、全体的に簡略に書かれているのが特徴である。また、書目の中には合綴して冊数を半減したものが目立つ。冊数を少なくすれば表紙が省けるため量が減らせる。扱いも便利になるので多くの本が幕末期に合綴されたようだ。

本稿では仮に、大蔵虫払目録Aを継承しつつこれよりも後に成立した目録ということで、当該目録を「大蔵虫払目録B」と呼称する。

図 2-①　大蔵虫払目録 B の三冊揃いの表紙

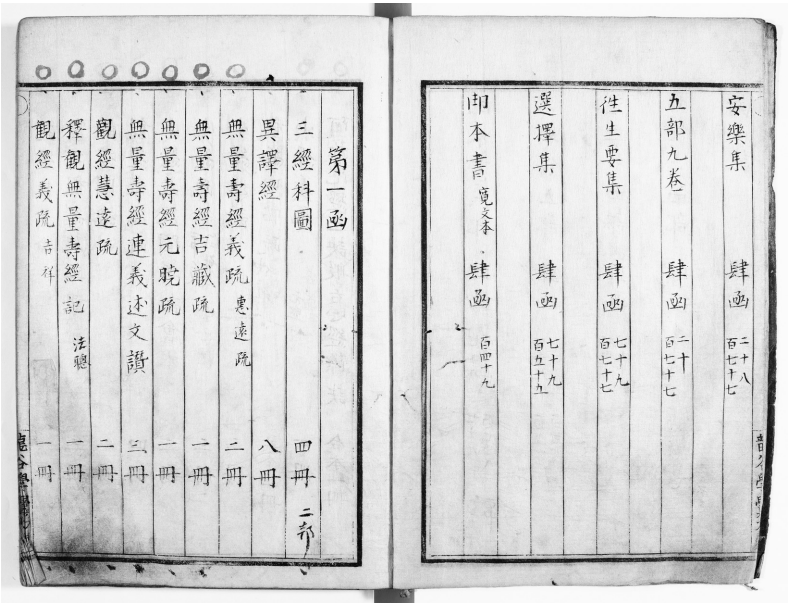


図 2-②　本文冒頭

〈両者の関係〉

大蔵虫払目録Aと大蔵虫払目録Bの関係であるが、両者を比較すると、大蔵虫払目録Aにあった書き込みが大蔵虫払目録Bでは省略されたり、簡略化されている。例えば、Aでは内典版本の一四八函の「密軌問弁」という書目の下に「天保四虫干箒欠本故、再補之納蔵／天保五虫干欠本□（出カ）故二部トナル」という書き込みがある。これは、天保四年（一八三三）の虫干しの時に欠本だということで新しく一部補ったが、天保五年の虫干しのときなくしたと思っていたものが見つかったので、今は二部になっているという。同じ本が二部となったことの経緯を説明しているのである。一方、大蔵虫払目録Bの同じ内典版本の一四八函の「密軌問弁」では、単に「二部アリ」となっている。Aに見られた欠本を示す貼り紙もBではなくなっており、欠本である旨も記さずただ空欄にしている。大蔵虫払目録Aの後、それを引き継ぎつつBが作成されたと考えられる。

先行する大蔵虫払目録Aがあったにも関わらず、新たに大蔵虫払目録Bを作った経緯は謎であるが、一般的にこうした拡大を続ける書庫の目録はいずれかのタイミングで作り直さなければならない。目録Aでは内典の版本と外典それぞれの末尾に手書きの罫紙を使用して新規の入蔵書に対応していた。しかし、幕末になり入蔵書が増えるにつれて煩雑になってきたはずである。このため、これを継承する目録として作られたのではないかと一応は推測される。

〈『続大蔵虫払目録』二冊〉

外題・内題ともに「続大蔵虫払目録」、大本二冊で、丁子色布目押文様である（請求記号：201.7/20-w/2）（図3）。「龍谷學黌大蔵」の版心を持つ黒の罫紙を使ってはいるが、「龍谷學黌大蔵書」の印はない。理由は後述するが、幕末の文久二年（一八六二）に成立した新しい目録であり、そのためか殆どが白紙の罫紙ばかりである。法量は二六・五×一八・七㎝。

丁数は、第一冊は遊紙がなく、罫紙の本紙のみで七四丁。そのうち墨付きは五丁のみである。第二冊も遊紙なしで、罫紙のみ六八丁。このうち墨付きは最初の外典部の二一丁とその後に七丁白紙の罫紙が続いた後に、写本部が四丁入る。以下、白紙の罫紙が続くが、白紙の二七丁目に「邪教書類」と題された書目が列記され丁が半丁あり、それ以降はまた白紙の罫紙が九丁入っている。

原装と思われ、大蔵虫払目録Bと同様表紙に貼り紙がされており、第一冊は、「肆　従百九十三」と書かれ、内典の版本一九三函以降の書目が収録されていることを示している。ただし、中の目録では一九二函から始まっている。第二冊表紙の貼り紙には「写　従三十四／外　従九十三（「三」に「みせけちして「二」）函」とあって、三四函からの写本と、九二函からの外典の目録であることを示している。

全体として内典版本四八部、内典写本四〇部、外典二六八部が収録されている。第一冊は内典版本が一九二函から一九六函まで。以下は白紙である。第二冊は外典から始まっており、外典九二函から一三六函まで。内典写本が最後で、三四函から三七函まで。先の大蔵虫払目録Bの続編であること明らかである。

外典の書目数が非常に多いのが特徴で、大蔵虫払目録Aでは外典函が八五函までだったものが、当該目録では一三七函まで増えている。幕末から明治初期に外典の伸びが激しかったことを如実に物語っている。この背景には、廃仏思想やキリスト教の影響がある。幕末、明治期には儒学者や国学者の廃仏思想が盛り上がりを見せ、さらにキリスト教も禁止を解かれ、仏教は窮地に陥ることとなった。学林においてもこれらに対抗すべく、天保七年（一八三六）二月に外典の購入が議論されるようになる。同年の六月には学林の登科規則に仏教学以外に儒学・暦学・国学などが科されるようになった。暦学は、西洋の地動説から仏教的世界観の基本である須弥説を守るためである。[5] 当該目録にも多くの天文暦学の書目が載せられている。

成立年は先述の大蔵虫払目録Bの記述より文久二年（一八六二）夏であろう。二冊とも冒頭に「参事　前豊

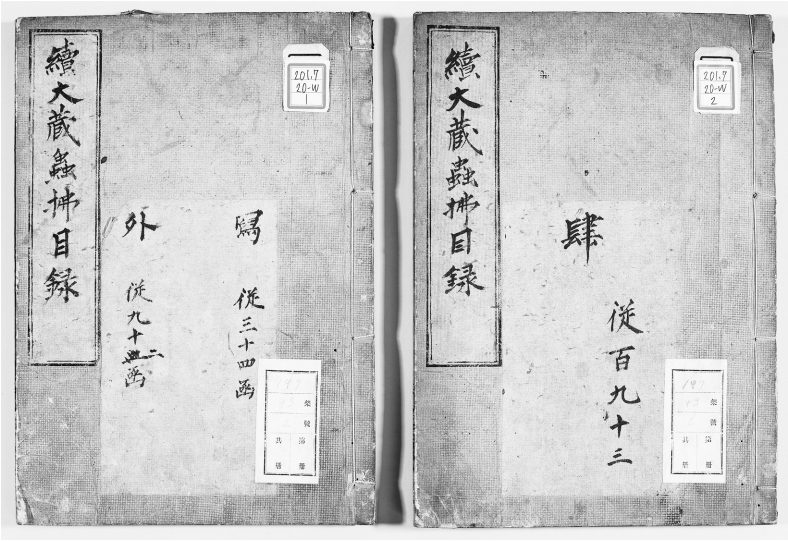


図 3-①　『続大蔵虫払目録』表紙

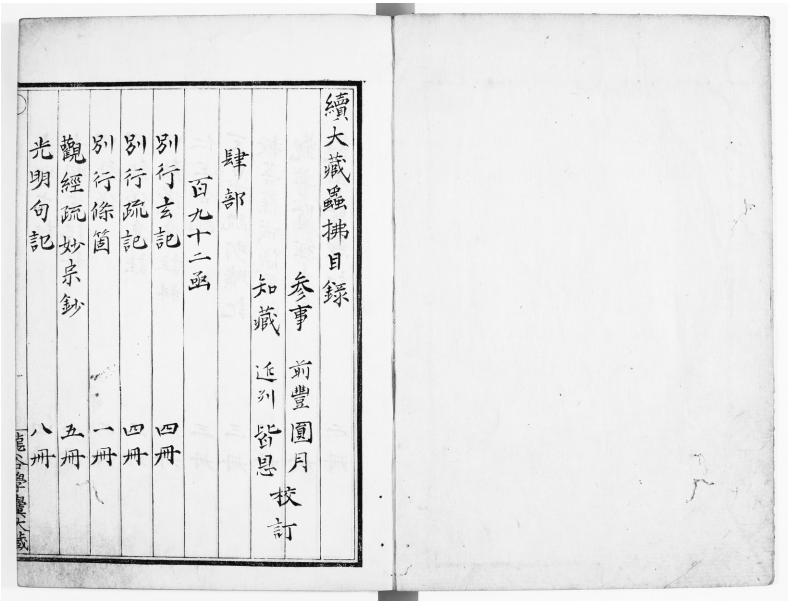


図 3-②　本文冒頭部

円月／知蔵　江州　皆恩／校訂」とある。この円月は、豊前の東陽円月（文政元年～明治三十五年（一八一八～一九〇二））のこと。浄土真宗本願寺派の学僧で、明治二十年（一八八七）に当時の学林の最高位である勧学になるも、宗論の上で議論を巻き起こして停講を命じられた後は自坊西光寺で東陽学寮を再興し、教学研鑽や後進の指導、地方教化に尽力した学僧である。[6] 知蔵として記された皆恩は、赤松皆恩（文政十年～明治二十九年（一八二七～一八九六））と推測される。近江の易行寺大乗の子で、十五歳の時京都に遊学、外典を学んでいる。[7]

文久二年成立以来、明治初期まで利用されたようである。外典部一一二函の前に「文久第三癸亥安居／知蔵僧鎧」とあり、筆跡からおそらく一一二函から一一三函はこの僧鎧の記述であろう。文久二年以降も順次書き足されていた。外典部は一三七函で終わっているが、この一三七函には「習文録」十冊の書目が挙がっている。これは皆川淇園編で明治九年刊（一八七六）である。よって、大蔵虫払目録Bと共に明治九年頃まで書き継がれ利用されていたと推測できる。同目録には、第一冊に六九丁、第二冊に四二丁の白紙がある。長く増補していくつもりで料紙を多く綴じ込んだのだろうが、明治十年代以降は利用されなくなってしまったということであろう。

なお、先述したが、第二冊の白紙の罫紙の一部にやや唐突に「邪教書類」という項目が半丁分書かれている。他と違って函番号はない。「新旧両約全書」一冊、「新約全書」の中本三冊のものと小本七冊のもの、「釈教正誤」九冊、「新旧両約書抜書」小本二十冊と、合計五点の書目を挙げている。

これらの書物の入蔵については、『学林万検』（二十一巻）の文久二年六月、書肆丁藤（丁子屋藤兵衛か。西本願寺寺内町である魚棚通油小路下ルの本屋。姓は小林）から「世間未流布之本」として『旧約全書』、『新約全書』の売り込みがあり、学林としては購入しなかったという記事が見える。『旧約全書』は西本願寺から下付を受けたこと、他にも『学林万検』には、同年七月には宣教師が書いた本を漢文になおした『英国志』七巻（文久元年刊）や『聯那志略』二冊（文久二年刊）を購入したとの記事が見える。文久元年（一八六一）五月六日には異国船の来航

が活発化していたが、学林では異国船の本来の目的はキリスト教を弘めたいというところにあるとして危機感を強めていた。[8] 当該目録の「邪教書類」はこうしたことと対応するのだろう。

以上の大蔵虫払目録を見ると、いずれも「龍谷學黌大蔵」と版心に印字された黒の罫紙を利用し、その書き方は、半丁ごとに最初に函とその番号をまず書いて、そこに各函に入っている本の書目を列記するというものである。凡例に寛政五年とあるので、その頃から大蔵虫払目録は存在したのであろう。しかし、寛政五年当時のものは失われており、現在残っているのは大蔵虫払目録Ａ（仮称）、大蔵虫払目録Ｂ（仮称）、『続大蔵虫払目録』の三種類である。

まず文政年間頃に大蔵虫払目録Ａが成立し、弘化四年頃まで使用された。そして正確な年代は不明だが、大蔵虫払目録Ａの書き込みや欠本の貼り紙を省略するなどより簡略化させた形で、大蔵虫払目録Ａを継承した大蔵虫払目録Ｂが作られ、文久二年頃まで使用され書き継がれた。そして、この大蔵虫払目録Ｂの続編にあたるのが『続大蔵虫払目録』で、これは文久二年に作られて明治初期まで利用されたと考えられる。一過性の目録ではなく、新規の入蔵書や欠本の補充状況など、常に情報更新が行われている。毎年七月頃に行われる虫払いの度に持ち出され、恒常的に蔵書のチェックに利用されていたのだった。

また、これら三種の大蔵虫払目録から、学林蔵書が書庫で函ごとに入れられて管理されていたことがわかる。蔵書は内典の版本、内典の写本、外典の三種類にわかたれ、この三種類ごとに番号が付いた函が用意されて蔵書が収められていた。

なお、学林にはすでに延宝四年（一六七六）、明で開版された嘉興蔵大蔵経を入蔵させていたとされる。[9] これも所化達に開放されていた可能性があるが、大蔵虫払目録は嘉興蔵を含んではいない。嘉興蔵は別の経蔵に納めら

れていたのだろう。

二　智洞編『龍谷学黌内典現存目録』の影響

〈写本の分離〉

大蔵虫払目録AとBともに、内典に関して書目の配置に特徴が見られる。まずひとつは、版本と写本が別になっていることで、かつ版本が先になっている。

実は、学林書庫では、版本と写本はもともと分けられていなかった。それは、学林最初の蔵書目録で、学林第七世能化として知られる桃華坊智洞（元文元年〔一七三六〕～文化二年〔一八〇五〕）が天明三年（一七八三）頃に編纂した『龍谷学黌内典現存目録』五巻（龍谷大学大宮図書館所蔵、写字台文庫、請求記号：000. 163/5）と比較するとわかる。

なお、『龍谷学黌内典現存目録』の編者智洞は、一般には学林の第七世能化かつ日本近世最大の宗教騒乱である三業惑乱の主要人物として知られる。しかしその一方で、一七〇〇年代半ばから末まで蔵書が飛躍的に増えているが、これら蔵書の充実と整理を統括した人物でもあった[10]。

さて、『龍谷学黌内典現存目録』にも書目の上に函番号が付されているが、大蔵虫払目録のものと比べると、内典の版本と外典では両者の函番号はほぼ一致するものの、写本は全く異なっている。これは、智洞編『龍谷学黌内典現存目録』が編纂された天明三年頃は写本と版本は未だ分けられておらず、函の中に混在していたことが理由と推測される。例えば、『龍谷学黌内典現存目録』では「述記貫練編」という書目は「写百四十五」となっている。しかし、大蔵虫払目録ではそもそもこの番号の写本の函は存在しない。幕末に作られた『続大蔵虫払目

録』でも三七函までしかない。天明三年時点では写本は版本と同じ函に入れられていたのでこの番号だったことは明らかである。おそらく智洞の時代までは写本版本関係なく函に入れていたが、天明三年以降、増え続ける蔵書の管理上、装訂も書型もばらつきがちな写本を各函から抜き取って、新しく用意した写本用の函に納めたのだろう。

〈『龍谷学黌内典現存目録』の影響〉

さて、『龍谷学黌内典現存目録』を編纂した智洞は、三業惑乱で対立した本山西本願寺と在野のうち、西本願寺側の代表者であった。この騒乱は全国に波及し、ついに幕府の裁定するところとなったが、結果は西本願寺側の敗北であった。智洞は混乱の責任者として処罰され、文化年間に江戸で獄死している。このため、彼の編纂した目録は長い間表向きは隠されたようで、大蔵虫払目録ＡとＢには出てこない。しかし、大蔵虫払目録Ｂの続編にあたる『続大蔵虫払目録』には写本部の最後の函に「桃華坊目録五冊」として掲出されている。文久二年から明治頃までに許されて学林の蔵書に加えられたのだろう。

秘匿されていた『龍谷学黌内典現存目録』であるが、実は大蔵虫払目録と大きな関連がある。ひとつには、これらの大蔵虫払目録と同じ、版心に「龍谷學黌大蔵」とある黒い罫紙を使っていることである。しかし、最も影響を与えているのは、内典の書目の配列である。

『龍谷学黌内典現存目録』の特徴はふたつあり、ひとつは学林依用の嘉興蔵大蔵経を含むこと。そしてもうひとつは、独自の配列を持つことである。独自の配列とは、全体をインド、中国、日本の三つにわかち、それぞれに浄土教経典やその関係書を最初に出し大蔵経から日本人の注釈書までを列挙していることである。いわば、浄土教を中心とした仏書全体の中に、真宗を位置づけているのだ。大蔵経を含むために、こうした編集が可能であった。

大蔵虫払目録は、この構成を踏襲しているのである。ただし、大蔵経を含んでいないため、インドの著述はなく、浄土教の根本経典である『浄土三部経』の中国の古註釈から始まる。ここで一般的な浄土真宗の蔵書目録であれば、『浄土三部経』に次いで親鸞が選定した七高僧の著述をまとめた『七祖聖教』や親鸞の主著『教行信証』などが列記される。しかし、『龍谷学黌内典現存目録』に倣っているため、次に並べられるのは華厳経関係書である。そして、その後は天台、密教、禅宗、三論、法相、律、小乗、通用と続く。

したがって、同じ浄土教関係書であっても、『浄土三部経』は第一函に納められているが、『安楽集』や『浄土往生伝』などは中国人の作った雑著にあたるため二八函以降に入っている。日本人の著した浄土経典注釈書などは三九函以降である。『教行信証』や『往生要集』は日本人著述の浄土教聖教のためさらに下り、七八函以降の配置となる。浄土真宗の根本聖典である『教行信証』であっても、これを最高聖典として第一に考えるのではなく、日本人の雑著のひとつとして学術的に突き放して位置づけている。

大蔵虫払目録がこうした配列であるということは、当時の学林蔵書がこうした分類法となっていたということだ。そしてそれは明治期まで維持されたということになる。三業惑乱により智洞は罪人として扱われた。しかし、学林蔵書の最も基礎的な部分にその影響を残したと言えるだろう。

学林ではなるべくこの分類を維持しようとしたようで、新規の入蔵書を示す別筆で書き込まれた書目を見ていくと、新規入蔵書を分類に当てはめるために既存の函に入れていることが多い。しかしながら、同じ函に入れるのは限界があるため、函自体を増やさざるを得ないが、新しい函は後ろにまわすことが多く、分類が適用できていない。こうした事情から、例えば、複数の版が存在する版本の『教行信証』はそれぞれ入蔵の時期が違ったようで、ほとんどがバラバラの函に納められている。入蔵書が増えれば仕方ないことであるが、総じて函番号が後ろのものは智洞の分類法が守られていない傾向にある。

以上見てくると、学林蔵書は天明三年頃成立の智洞編『龍谷学黌内典現存目録』が成立した天明三年以降に、内典の函から写本だけを抜き取って別立てにされた。そして、この『龍谷学黌内典現存目録』は、大蔵虫払目録に独自の分類法をもたらしている。大蔵虫払目録AとBに添えられている凡例は寛政五年（一七九三）の年記を持つが、これは智洞の『龍谷学黌内典現存目録』成立の十年後にあたり、また智洞が能化となる三年前にあたる。ここからも、大蔵虫払目録は智洞の蔵書整理の影響を強く受けていると推測される。

三　大蔵虫払目録に関わった人々

〈知事と参事の関わり〉

大蔵虫払目録は長期に亘って使用された。この目録を作り、書き込みを行っていたのは、学林においてどういった地位の人であったのか。

『続大蔵虫払目録』は参事東陽円月と知蔵の赤松皆恩が校訂者として記されていた。参事とは学階のひとつで、当時最高位だった勧学、次が司教、そして看護、その下が参事である。安居の際は参事も講義を受け持った。また、夏安居開講中の記録係を知事と呼ぶが、それ以外の期間に知事の代行を務めるのが看護という職務であった。参事は看護の補佐も務めた。

知蔵は学階ではなく一年任期の役職名で、学林の図書係とも言うべき存在であり、蔵書の出納を司っていた。また、先に触れたが、『続大蔵虫払目録』には、「文久第三癸亥安居／知蔵　僧鎧」と、新規に入蔵した外典を知蔵がまとめて書き込んでいる箇所があった。新規の入蔵書があった場合に大蔵虫払目録にその書目を書き足すの

も知蔵の仕事だったのだろう。

他のふたつの大蔵虫払目録も、知蔵や参事が作成や書き込みに深く関わったと推測される。以下に、知蔵と参事について、書庫や出納業務を確認したい。

〈知蔵とその仕事〉

参事と知蔵のうち、とくに知蔵は学林蔵書の出納係として注目される。『龍谷大学三百五十年史』に拠れば、その最古の記録は承応元年（一六五二）成立の「学庠大衆位職制法序」で、上座中の下位から「捨頭」を任命して閲覧業務にあたらせていたことが示されている。これが知蔵のはじまりである。延享四年（一七四七）、同じく学林記録のひとつ『学林万検雑牘』一巻に「蔵司」が任命されている記事がある。捨頭は、この頃には蔵司と名称変更されていたようだ。そして、天明六年（一七八六）頃に、「知蔵司」と改称された。文化四年四月の『学林万検』巻一、「階級之次第」によれば、蔵司（知蔵のことを言うのだろう）は夏中一人、上座（学林在籍十五年以上の者）のうちより司教の推薦で選ばれるとされている。任期は一年であった。[11]

また、天保七年（一八三六）八月には、今まで一人だけであったものが「参知蔵」という補佐役が付けられることとなった。これは、夏安居期間以外に知蔵の仕事を行う者である。江戸後期、学林では夏の講義である夏安居が春と秋の安居に比して発展していったので、その期間中は知蔵が、それ以外の期間は補佐役の参知蔵が出納係を担当するということであろう。ただし、大蔵虫払目録には参知蔵のことは一切出てこない。また、参知蔵のその仕事内容に関しても管見に入らなかった。

書庫や蔵書に関して、本山からの達書や学林役所の条目などを記した江戸時代後期の資料『厳護録』巻一[12]には、以下のようにある。

定

一開蔵、例月一・六与相定候事
　但、返納随時たるへし、尤済印不相調間者、其席不可退去、且司教寮臨時非制限事
一拝借目録江記名代筆不相成候事
　但、司教寮者侍者記名たるへし
一隣寮たりとも内分ニかしかり堅停止之事
　若内分之借貸及露顕者、双方とも可為越度事
一拝借書類取扱麁末ニ致し候事及見聞候ハヽ、早速可被取上事
一蔵鎰及目録者、役所江罷出取扱致すへし、知事寮江持返候儀、決而不相成候事
一開蔵之砌者、当役江可被相達事
一寮外拝借、前々より不相成候事
一無用之拝借停止之事
一蔵書拝借返納相済候上、退籍願可被差出事
　附り、拝借有無否簡寮司応対之上、役所江可相達事
一知蔵交代之砌、精々相調理候上、其趣双方立合司教寮江可被相届事
　右之条々心得違無之様、衆寮江不洩様可被申渡候

知蔵司

まず、学林で学ぶ者達に書庫が開かれるのは毎月一日、六日、十一日、十六日、二十一日、二十六日の六日だ

ったこと、ただし返却はいつでもよいことが記されている。また、本を借りる時や返却の時、知蔵の仕事を司教がチェックしていた。本を借りる者は「拝借目録」つまり、貸し出しのための目録があってそこへ記名するが、代筆は許さないとしている。一方、書庫の鍵と目録は役所に置いておくこと、決して知蔵が勝手に知事寮へ持ち込んではならないとしている。知事寮とは役職のある者たちの寮のことか。なお、「寮外拝借、前々より不相成候事」とあって、学林蔵書は学林外の者には開かれていなかったことがわかる。

また、知蔵には火事の時に書庫を守るという仕事もあった。『学林万検』巻十八、安政五年（一八五八）六月の記録には「一経蔵ハ赤味噌ニ而目塗を為致、守護ハ知蔵・参知事江申附置」とあり、知蔵が経蔵の扉などに赤味噌を目塗りして炎が入らないよう守護するものと記録されている。[13]

右に加えて、知蔵の仕事には蔵書の紛失や錯乱をチェックする役目があったようだ。『厳護録』の文政三年（一八二〇）六月の条には、知蔵に対して書物を大切に扱うことや書物出納の時は知事や看護へ連絡し立ち会いしてもらうことなどの申渡しと共に「失本・闕本有之者、早速遂僉儀可訴出事」[14]とあって、「失本・闕本」が見つかればすぐ調べ、報告することが定められている。

〈知蔵の代行をする参事〉

『学林万検』巻十一、嘉永元年（一八四八）四月頃の記事として、「蔵書段々致乱雑、欠本之調も難相成ニ付、此度改て蔵書不残致点検度」と、蔵書が乱れ、欠本がどれかもわからないほどであるので、以前より蔵書の悉皆調査を西本願寺へ願い出ていたものが「今日御聞済ニ」なったので、「夏間参事玄明、夏中知蔵玄応、外ニ昨夏知蔵宣正、右三人」が調査にあたることとなった旨が述べられている。[15]本来ならばこれは知蔵の仕事であろうが、参事の玄明も任命されている。「夏間参事玄明、夏中知蔵玄応」とあるが、これは「夏間」すなわち夏安居以外の期間の参事玄明、「夏中」つまり夏安居中の知蔵玄応という意味であろう。学林蔵書に関する仕事は知蔵職が

行うが、それは夏安居中だけであって、それ以外の期間は参事が代行していたことを想像させる。

さらに、同じく『学林万検』巻十一に、弘化四年（一八四七）五月頃の記事として以下のような記述がある。学林で預かる書庫と雑物を入れておく蔵の鍵と、門の鍵についてである。[16]

一伊勢浄薫助教、〈造営懸り司之〉本講師より之内意とて、経蔵鍵・雑物蔵鍵幷門之鍵共ニ、元来夏中ハ知事、夏間ハ看護所へ納置、夏中ハ知蔵職一六開蔵之砌、役所より申請ケ開蔵、早速又役所へ返納、雑蔵之鍵も同様之事、然ルに近年古法を不弁、扨又夏間ハ参事持、夏中ハ知蔵所持之筈と相心得、門之鍵ハ月々簡寮読渡スケ条之通、鍵ハ役所ニ差置、開門之頃簡寮職夙ニ起き来而、役所より申受ケ開門、終而又役所へ相納候筈、乍去門鍵之儀ハ格別、道具紛失之基ニも不相成次第故、内々ニ而鍵ヲ官僚手元ニ預り置候而も、不苦次第也とて、門鍵之外両鍵二具、幷非常用意之合鍵トメ三具持参ニ而、役所へ被相渡候事、知事ト看護とハ余役とちかひ、在役中不埒之次第有之候ハヽ、早速罷出埒明可申旨、門徒之請書迄差上置候重任ニ而候へ者、参事や知蔵ニ任セ置、若彼等手元ニ而不埒有之候共、当役之身分ニ取り過失難遁事故、今度古法ニ復し相改候様ニト急度相改被申候事〈今蚊帳帳取出シ之節、当分不足ニ有之候、尚又蔵本ニも一両部当分不足之書有之ニ付、ケ様ニ相改リ申候、乍去両種共ニ後日出申候、薦上評議有之、ヤカマシキコト也〉

（傍線筆者）

経蔵の鍵に関してだけ見ると、書庫と雑物の鍵はいずれも夏安居中は記録係である知事が、それ以外の期間は看護の所へしまっておき、書庫が開く毎月一と六の付く日には知蔵が鍵を取りに来ることになっていた。しかし、

傍線部にあるとおり、近年はこうした決まりを守らず、夏安居の期間以外は参事が、そして夏安居中は知蔵が鍵を持っているはずと皆が心得ていると述べられている。夏安居以外の期間中、参事が知蔵の代行をしていたと見てよいだろう。

このように見てくると、知蔵と参事こそ書庫に関する実際的なことを行っていた者たちである。『続大蔵虫払目録』に関して言えば、新規の入蔵書の書目も書き入れている。欠本を調べるのも仕事であったから、知蔵と参事は欠本が見つかった場合は当然大蔵虫払目録にそれを書き込んだろう。両者は書庫だけでなく大蔵虫払目録にも非常に近かったと推測される。

四　閲覧目録だった可能性

〈嘉興蔵の利用〉

ところで、学林の僧達が、書庫の蔵書とは別になっている嘉興蔵大蔵経を利用する際にはどうしたのだろうか。実は、知蔵がこの大蔵経の目録を持ち、学林の嘉興蔵を所化に貸し出していたようである。龍谷大学大宮図書館所蔵の『大明三蔵聖教目録』（龍谷大学大宮図書館所蔵、請求記号：201. 1/55）は近世の版本に近代になって洋装の表紙を付けたものであるが、版本の表紙には以下のように墨書されている。

明蔵目録二巻、宣収知蔵宅、備検索之用、勿納之経蔵

明蔵とはここでは学林所蔵の嘉興蔵を示すと考えられる。そして、「明蔵目録」とは、『大明三蔵聖教目録』のことで、嘉興蔵大蔵経やその覆刻である黄檗版大蔵経の目録として、近世に広く利用された本であった。右の書き込みは、この目録を閲覧に便利なように「知蔵宅」に置いておき、経蔵にしまってはならないとしている。つまり、学林依用の嘉興蔵大蔵経目録を知蔵が「検索」の備えとして持っており、学林の者たちに利用させていたことになる。これを裏付けるように、大蔵虫払目録Ｂの内典版本部三六函にある書目「大明三蔵聖教目録」には「在知蔵□笥」とある。また、同じ函には「明蔵目録捷覧」という書目も挙がっているが、その下には「知蔵所ニ在」と書き込まれている。大蔵経の目録類が知蔵の手元にあったことを示しているのである。

また、同書の後見返しには、嘉永四年（一八五一）年、当時参事を務めていた宏遠による書き込みがある。宏遠（一八〇八～九〇）は、近江の円照寺十四世住職で、兄である超然とともに宗主広如の命を受け『真宗法要典拠』を校補したことで知られ、明治三年（一八七〇）には勧学に任じられている。近代、明如宗主の顧問となって補佐し、兄の超然と共に明治維新時代に対処した人物である。[17]

舶来画一目録、日夜翻閲漸就毀壊、会閲市獲翻刻一冊、因附蘗（檗カ）本目録之後、更写立又続録七帋、以備尤蔵搜索之用云

嘉永四年辛亥春参事宏遠議

嘉興蔵目録の利用が頻繁であるために壊れてきたので版本を市中で見つけて入手した、それは黄檗版に入っている目録であるという。これは黄檗版大蔵経に含まれる『大明三蔵聖教目録』を指していると思われる（ただし、当該目録は黄檗版所収のものではなく、より便利に活用できるよう天海版大蔵経に付された千字文を足すなどした町版であ

る）。皆があまりに利用するので破損してしまったものに替えて、参事宏遠が新しく目録を調えたのだった。

「更写立又続録七帋」とあるのは、宏遠が当該目録の末尾に嘉興蔵の又続蔵の目録を書写したものを加えていることを示すと思われる。というのは、この『大明三蔵聖教目録』は嘉興蔵すべての目録ではなく、正蔵と続蔵の目録であって、又続蔵は漏れている。そのため、七枚の料紙にそれを書写して「以備尤蔵捜索之用云」と経本を探すための備えとしたと述べている。実際、この版本の後ろには七枚の手書きの目録が合綴されている。続蔵の末尾の部分の八十五函から九〇函までと、又続蔵の目録である（続蔵の末尾部分の目録が書写になっている理由は不明）（図4）。学林の者たちは嘉興蔵を又続蔵まで活発に活用していたことが窺われる。

同目録から、知蔵は嘉興蔵の出納も行っていたと考えられる。そして参事がその目録を作成していた。同目録にはあちこちに破損や疲れが見られ、相当使い込まれたと判断できる。当時、多くの所化や学僧らが嘉興蔵をもよく閲覧していたことの証左である。

〈閲覧のための工夫〉

先述の通り、知蔵と参事は身近に書庫の鍵と閲覧用の目録があった。本来は知事や看護といった、より上位の位職の者に鍵と閲覧目録を預けなければならなかったが、実際の職務にあたることから、目録は両者の手元に止まりがちであったのだろう。嘉興蔵も含め閲覧に必要な目録を手元に置いていた知蔵であるが、あるいは大蔵虫払目録もまた閲覧目録であった可能性がある。

その理由として、まず前項で紹介した参事宏遠が整えた『大明三蔵聖教目録』の体裁が大蔵虫払目録と同じであることが挙げられる。宏遠が作った又続蔵部分の目録は函毎に書目を並べた目録であり、これは大蔵虫払目録と同様である。さらに、大蔵虫払目録と同じ、半丁十行で版心に「龍谷學黌大蔵」と刻まれた黒の罫紙で書かれている。

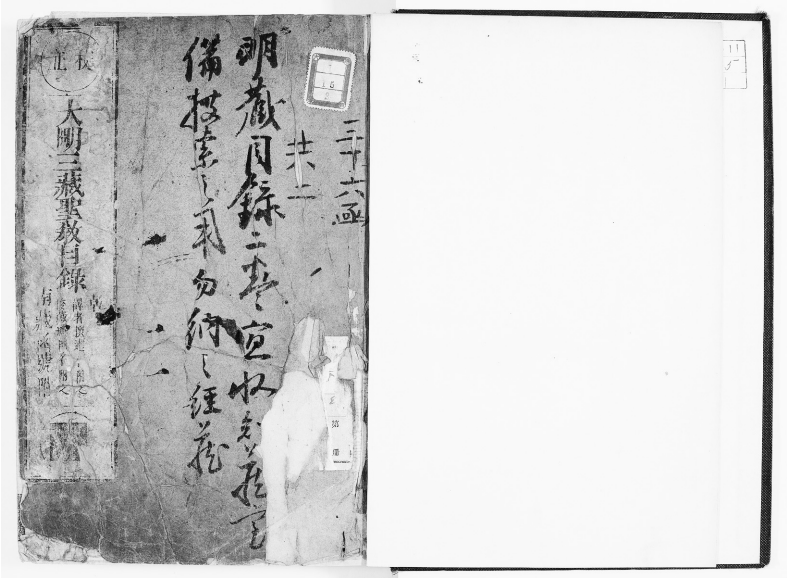


図 4-①　『三蔵聖教目録』表紙

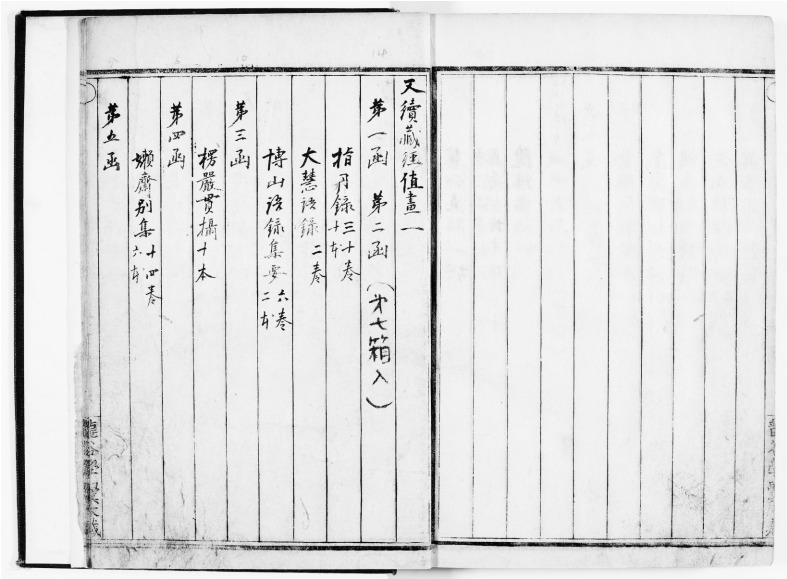


図 4-②　又続蔵部分冒頭

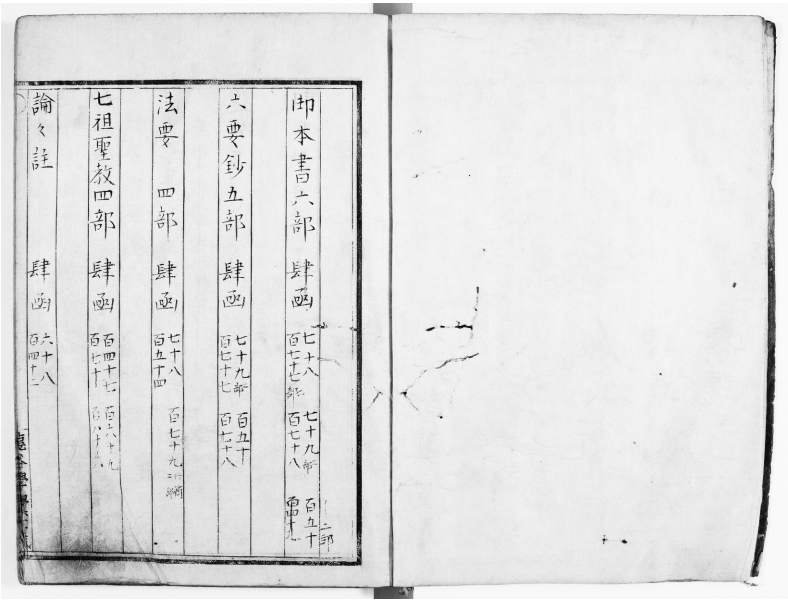


図5　大蔵虫払目録Bの真宗聖教の書目を列記した部分

また、大蔵虫払目録AとBどちらにも、冒頭部に『教行信証』や『往生要集』、『七祖聖教』など、真宗学僧がよく使いそうな書目が列記された箇所がある（図5）。それぞれの書目の下には函番号が記され、書目から函番号がわかるようになっている。いずれの書目にも複数の函番号が示されているので、同じ書名の本が複数あり、それぞれ別の函に入っていたとわかる。これは副本があったというよりも、同じ書名であっても版が異なるものが複数あり、入蔵時期が違ったためにバラバラの函に入っていたと推測される。

この記述は、こうしたバラバラの函に入っている本を探すにはたいへん便利である。そもそも、函ごとに書目を列記している大蔵虫払目録は、書名で本を探すことはできない。特に、複数の函に入っている場合は網羅的に探すのが非常に困難となる。列記されている書目は、いずれも頻繁に閲覧されると予想されるが複数の函に入っている書目ばかりである。したがって、書名から函がわか

るようにしているこの記述は、この目録を閲覧目録として利用した際の不便を補う工夫のように思われる。加えて、この記述は大蔵虫払目録Aでは前遊紙に書かれていたが、Bでは本紙である罫紙に書写され冒頭部に入れられており、より一般化している。やはり大蔵虫払目録が閲覧目録を兼ねていたことを感じさせる。

また、大蔵虫払目録は基本的には函番号、書名と冊数のみの記述であり、ほとんどの場合作者の名は記していない。特に大蔵虫払目録Aでは、たとえそれが学林の高僧の手になるものであっても記していないことがある。しかし、大蔵虫払目録Bとその続編である『続大蔵虫払目録』では明記されていることが多い。とくに写本部の本に関して、著者や書写者の名前の記載が頻繁に出てくる。例えば、写本部二一函の『教行信証樹心録』の作者名を智暹と明記したり、二六函の『大経安永録』作者を恵雲と記している。恵雲は江戸中期の西本願寺の高僧慧雲であろう。写本部二八函に至っては、大蔵虫払目録Aが十六の書目を挙げて一人の作者名も記していないのに比して、大蔵虫払目録Bでは十七の書目（「鷺森含毫」が別筆で書き足されているため十七になっている）の内十に作者の名を書き込んでいる。また、Bの写本部九函の「仏性論　一冊」には、「知空講主親筆」と朱書きされている。知空は江戸前期から中期に活躍し、学林の基礎を築いた第二世能化である。大蔵虫払目録Aには「仏性論　一冊」の記述はあってもこの朱書きはなかった。

これらはいずれも別筆で、目録成立後に書き足していったものであろう。写本は版本より情報が少ないため、判別しやすいよう名前を書き込んでいるように思えるのである。

大蔵虫払目録は、いずれも手ずれが激しく、日々活用されていた印象を受ける。右のような状況を総合すると、閲覧目録も兼ねていた可能性が指摘できる。

ただし、嘉興蔵も含め、これらはあくまで函ごとの目録である。大部分の本を書名で探すことはできない点は

やはり不便である。この不便を補う目録が存在した可能性があるが、それは稿を変えて論じたいと思う。

五　大蔵虫払目録の終焉

〈分類の変化〉

明治九年（一八七六）、学林は大教校と改称され、中学校や小学校も設置され新制度に移行した。近代を迎え、学林もまた近代国会に適合した形を模索し、大きく変容していく。当然のことながら、学林蔵書がそのまま維持されることはなかった。学校の形、また当時の情勢に合わせて蔵書の配列方針も変化し、それに伴って分類も変更されていったと推測される。

では明治期、大蔵虫払目録はいつまで利用されたのだろう。『続大蔵虫払目録』の外典部の最後の函一三七函には『習文録』が挙がっており、これが明治九年（一八七六）刊であることはすでに述べた。この年が大教校発足の年である。大蔵虫払目録が利用された下限もこの時期であると推測される。

もう少し詳しく見ていくと、明治五年、時の知蔵で大和の稲葉一道が編纂した学林の蔵書目録『真宗学庠典籍目録』四冊（龍谷大学大宮図書館所蔵、請求記号：201. 7/19-w/4）がある。知蔵の作った目録ということで、一応ながら閲覧目録と考えられる。他の大蔵虫払目録と同様、学林の蔵書印「龍谷學黌大蔵書」も押印されている。ただし、判型が大本ではなく半紙本で、罫紙は半丁十行であることは同じだが、版心は「龍谷學黌大蔵」ではなく「学庠勧学寮」となっている。書型をより扱いに便利な半紙本にしたかったために従来の罫紙を用いなかった可能性もあるが、所化ではなく勧学のための目録であったかも知れない。

さて、この目録は大蔵虫払目録とは異なり、函ごとに書名を列記するのではなく、分類ごとに書目を列記し、

その上部に函番号を記しているため、本を書名で探す者にとって便利になっている。さらに、嘉興蔵を又続蔵まで全て入れており、他の学林蔵書と合わせて探すことができる。

その一方で、その分類は大蔵虫払目録のもとのはすでに異なっている。第一巻は「真宗聖教部」から始まり、真宗聖教類が入っている。第一巻の目次を以下に引用する。

真宗学庠典籍目録第一

列次

□□（この部分、「内典」と書かれた上に貼り紙で抹消）浄土書類

真宗聖教部

真偽未決部

他師讃述部

三経註疏部

祖釈註疏部

宗侶讃述部

自他弁難部

真宗紀伝部

西鎮雑著部

まず『浄土三部経』から始まり、『七祖聖教』から『教行信証』などが続く。真宗聖教とその関係書が第一巻

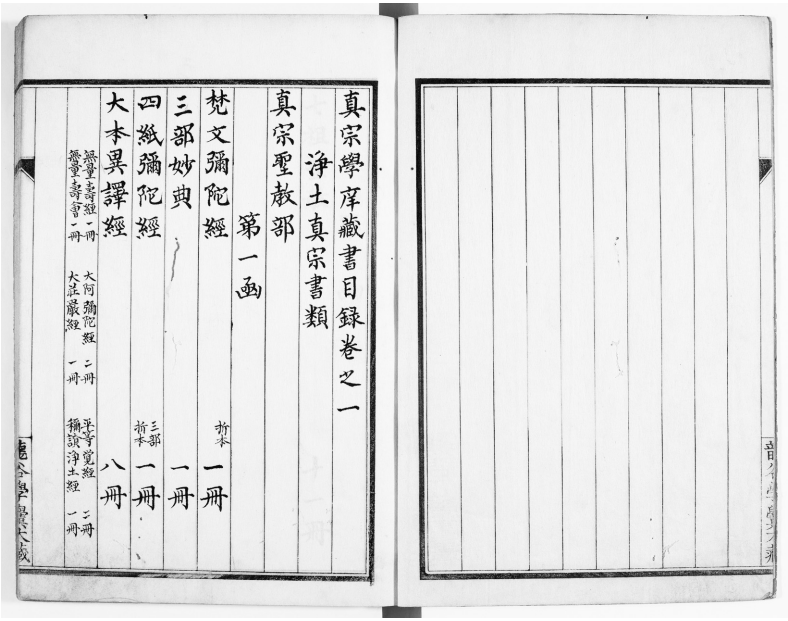

真宗學庠藏書目録卷之一
淨土真宗書類
真宗聖教部
第一函
梵文彌陀經　抄本　一冊
三部妙典　一冊
四紙彌陀經　三部抄本　一冊
大本異譯經　八冊
無量壽經　一冊
無量壽會　一冊
大阿彌陀經　二冊
大注嚴經　一冊
華嚴覺經　二冊
稱讚淨土經　一冊
真宗學庠藏書

図6　『真宗学庠蔵書目録』（十二冊）第一巻冒頭部

に集められており、江戸後期の智洞以来受け継がれてきた分類法は失われている。

ただし、このように分類は変更されているものの、同目録では函番号は江戸時代の番号のまま維持されている。この目録には、朱で新しく加えた書目に「明治十二年入蔵」と添えられている書目が見える。よってこの頃までは、分類法の転換の必要を感じつつも書庫は江戸時代の姿のままで利用されていたと推測される。

〈函番号の変更〉

しかし、これ以降に成立したと思われる『真宗学庠蔵書目録』十二冊（龍谷大学大宮図書館所蔵、請求記号：201.7/31-w/12）では、分類はもちろん函番号も違ったものとなっている。すなわち、第一冊を「子」巻とし、真宗聖教と『浄土三部経』の注釈書を、第二冊は「丑」巻として各種注釈書や親鸞の記伝関係など、真宗関係書を集めている「寅」巻は浄土宗の書である（図6）。以下、「亥」巻まで続く。干支で分け

られた種類ごとに函を用意し、函毎に書目を挙げている。もはや近世期の分類法もそれに基づいた函の配列もなくなっているのである。

この目録がいつ作られたかは明確でないが、内典専修の真宗学庠と普通教校の並立時代にあたる明治十九年（一八八六）頃には、時の知蔵服部範嶺により『龍谷学黌大蔵目録』二冊が編まれる。この目録は、先の『真宗学庠蔵書目録』十二冊を踏襲し、それに服部が行った蔵書調査の結果を書き込んでいるものである。よって、『真宗学庠蔵書目録』十二冊は、明治五年以降、明治十九年以前の成立である。

以上から、少なくとも明治十九年頃まで、おそらく明治九年には、学林の蔵書の分類が変更され、新しい分類に基づき用意された新しい函に移し替えられたようだ。大蔵虫払目録はその意味を失ったのである。

おわりに

以上、三種類の大蔵虫払目録を見てきた。大蔵虫払目録は、近世の西本願寺派檀林の蔵書目録で、毎年行われる書物の虫干しの際に蔵書調査をするのに利用された目録である。一過性の記録ではなく、長期間利用され書き継がれたものであった。

現在まで残された三種の大蔵虫払目録である大蔵虫払目録A、大蔵虫払目録B、『続大蔵虫払目録』は、おそらく、文政年間から明治九年頃まで使用された。そして、これら大蔵虫払目録は、三業惑乱で失脚し獄死した智洞の思想を受け継いでいる。智洞は、西本願寺の学校の蔵書の蒐集と整理を行い、『龍谷学黌内典現存目録』という目録を編纂したが、大蔵虫払目録はこの目録と同様に、浄土教を中心としたあらゆる仏典の中に真宗仏典を

位置づけた独自の配列を持っているのだった。

また、大蔵虫払目録は、主に知蔵と参事の役職に就いた者によって管理されていたと推測される。彼らは大蔵虫払目録と同じ様式の目録を付した大蔵経目録を作成し、学林所蔵の嘉興蔵を学林の者に閲覧させていた。さらに、大蔵虫払目録ＡやＢの冒頭には、一部の書籍を書名から検索できる項目がある。こうしたことなどから、大蔵虫払目録は閲覧目録としても利用されていた可能性がある。

大蔵虫払目録は近世期の学林書庫の様子を知る上で貴重な資料であることは疑いない。しかしそれだけでなく、近世で最大級の仏教教団の書庫の資料であることを考えれば、版本があふれ大蔵経をはじめあらゆる仏書が入手できる時代のひとつの到達点を示している。学林の書庫には智洞から受け継がれた、必ずしも宗祖の聖典を第一としない、学術的な視点が明治まで維持されていたのだ。この書庫で学び、かつ嘉興蔵大蔵経をも盛んに利用した所化達の研鑽は、近世の版本文化の影響の下、智洞のもたらした思想の中で行われていたのである。もちろん、こうしたことは近世仏教堕落論に一石を投じるものであろう。

本研究はＪＰ２１Ｊ４０―５９の助成を受けたものです。

註

（1）龍谷大学三百五十年史編集委員会編、龍谷大学、二〇〇〇年。

（2）同前書、通史編上巻、三五三ページ。

（3）拙稿「智洞編『龍谷学黌内典現存目録』の研究」『日本古写経研究所研究紀要』第七号、二〇一二年三月。

（4）井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』永田文昌堂、一九七九年。

（5）前掲書（1）、三六六～七ページ。

（6）柏原祐泉ら編『真宗人名事典』法蔵館、一九九九年。
（7）前掲書（4）。
（8）前掲書（1）、三六七ページ。
（9）前掲論文（3）。
（10）智洞の目録編纂については、前掲書（1）の三四四～四六ページに詳しい。
（11）前掲書（1）、三四九～三五二ページ。
（12）『厳護録』に関しては、龍谷大学三百五十年史編集委員会『龍谷学黌内典現存目録』史料編第三巻（龍谷大学、一九九〇年）の翻刻を引用している（二二～二三ページ）。
（13）同前書、六四八ページ。
（14）『学林万検』巻十八、安政五年六月の記録。『学林万検』に関しては、龍谷大学三百五十年史編集委員会『龍谷大学三百五十年史』史料編第二巻（龍谷大学、一九九〇年）を引用している（三九七ページ）。
（15）『学林万検』巻十一。前掲の『龍谷大学三百五十年史』史料編第二巻から引用している（一三五ページ）。
（16）『学林万検』巻十一。前掲の『龍谷大学三百五十年史』史料編第二巻から引用している（一一三～一一四ページ）。
（17）前掲書（4）。

Summary

A Book Collection Belonging to a Buddhist School: *Daizo Mushi-barai Mokuroku* 大蔵虫払目録 (Catalog of the Library of Nishi Hongwanji School)

Hisako MANNAMI

The *Daizo Mushi-barai Mokuroku* (大蔵虫払目録) is a catalog of the book collection of the Nishi Hongwanji School in early modern Japan, built for checking the books during the annual airing. This catalog gives a good picture of the state of the school's archive but has not been well studied till now.

Under the name of this catalog, three types of records remain to this day: *Daizo Mushi-barai Mokuroku* A, *Daizo Mushi-barai Mokuroku* B, and *Shoku Daizo Mushi-barai Mokuroku*. They were used for a long period from the Bunsei period (1818–1830) to around the 9th year of Meiji.

The *Daizo Mushi-barai Mokuroku* derives from the ideas of Chidō (智洞), who was disgraced and died in prison because of the Sangou Wakuran (三業惑乱). Chidō collected books for the Nishi Hongwanji school and compiled a catalog entitled *Ryūkoku Gakkō Naiten Genzon Mokuroku* (龍谷学黌内典現存目録). The *Daizo Mushi-barai Mokuroku* inherits the unique arrangement of Chidō's catalog, which focuses on Pure Land Buddhism, and ranked the Shin Buddhist scriptures (浄土真宗仏典) among those of the other denominations.

Since the *Daizo Mushi-barai Mokuroku* reflects the arrangement of books in the storeroom of the Nishi Hongwanji School, it can be said that the School collection was under the influence of Chidō's philosophy until the Meiji era.

The *Daizo Mushi-barai Mokuroku* also includes long incipits of the books,

allowing easy reference. This catalog could be used as a research tool for studies at that time.

It is expected that a more detailed study of these catalogs will provide further insight into the state of the archives, as well as to the understanding of the book culture of the time.

Contract Researcher,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Part-time Lecturer,
Ryukoku University